

## 『古新聖經問答』の語彙からみた19世紀初頭の口語

塩山正純

### Abstract

Recently in China, there have been many Chinese translations of the Testament translated by the Jesuits engaged in missionary activity in China. It is said that these translations are very important materials for the research into the history of the colloquial style of Chinese. “Guxin Shengjing Wenda (古新聖經問答)” was published by the authority of Mouly who was the Bishop of Zhili in 1862. It was a concise book, containing instructional material and propaganda that introduced the contents of the Testament, written in a colloquial style. In the latter half of every chapter, it used the question and answer style, and a more colloquial style in order to deepen the reader’s understanding. From the linguistic perspective, this paper will make an analysis of six pairs of old and new words (狼／甚、沒有／無、甚麼／何、這／此、那／彼、合／同／跟／與) and some other words, and examine the special features of the language in this book.

### 0. はじめに

近代の中国では、キリスト教宣教師によって漢訳聖書が数多く著された。そして、現在の中国語研究に対しても貴重な資料となっている。その中で、『古新聖經問答』<sup>1)</sup>は「天主降生一千八百六十二年(1862年)」に「主教若瑟瑪爾濟亜爾慕理孟(フランス・ラザリスト会士、ヨゼフ・マーシャル・ムーリー<sup>2)</sup>)」の許可のもとに復刻された、カソリックの新旧約聖書の簡略本、補助読本ともいうべき書物である。現在のところ、残念ながらその編著者は不明である。

本書は全29端(端は章にあたるもの)からなっており、新旧約聖書の内容を、旧約部分については前半14端、新約部分については後半15端で、それぞれ紹介、解説しており、各端の後半部分では問答形式を採用し、各端の前半部分に書かれた内容を繰り返して説明するという体裁をとっている。本書で全端にわたって使用されている文体は、通俗的な口語体である

ことから、本書は当時の社会の幅広い階層への宣教を意図して執筆され、ムーリー主教の同様の意図によって出版されたものであったと予想される。また、本書で用いられている語彙の中には当時の北方方言と思われるものや、イエズス会による他の聖書類には見られないものなど、本書ならではの興味深いものも数多く含まれている。そして、内容的にも他の漢訳聖書とは異なるところが見うけられる。

本稿では、先ず『古新聖經問答』の概要を紹介し、語史の面から『古新聖經問答』の持つ価値を検討したい。

## 1. 『古新聖經問答』について

### 1-1. 復刻の経緯とその著者

『古新聖經問答』は、その「主教准據（主教による復刻許可）」によると、当時の中国直隸<sup>3)</sup>地区主教ムーリーが、「書篋（竹製の本箱）」の中にねむっていたのを発見し、その復刻許可を経て、1862年に復刻された。ただ、本書の著者は目下のところ不明ではあるが、佐伯好郎<sup>1949</sup>にも、「『古新聖經問答』は（（フランス籍の—筆者注）耶蘇会士の著で、新旧両約聖書に関する問答）」とあり、耶蘇会士の手によるものであるといわれている。また、徐宗澤<sup>1949</sup><sup>4)</sup>にも、次のように、『古新聖經』という漢訳聖書が挙げられている。

『古新聖經』耶蘇會士賀清泰 P. Le Poirot 譯，係官話，章與節與拉丁文聖經不甚符同，抄本未刊。（『古新聖經』イエズス会士，賀清泰 P. Le Poirot 訳，官話で，章と節はラテン語聖書とあまり一致しておらず，抄本は未刊である。）

数ある漢訳聖書の中でも、『古新聖經』という名前の付くものには、イエズス会士「賀清泰（ポワロ）<sup>5)</sup>」の『古新聖經』、そしてこの『古新聖經問答』の二種しかない。書名、時代から考えると、『古新聖經問答』の著者は『古新聖經』の訳者「賀清泰（ポワロ）」であった可能性もある。ただし、本書の著者については、本稿の考察の範囲とせず、今後の課題にしたい。

### 1-2. 復刻時期

今回、資料とする『古新聖經問答』の復刻は、後に触れるムーリー主教の復刻許可にも「天主降生一千八百六十二年、主教若瑟瑪爾濟亞爾慕理孟准鐫（主教ヨゼフ・マーシャル・ムーリー・孟（振生），復刻を許可する）」と明記されているように、1862年である。しかし、先に触れたようにムーリー主教が、「書篋（竹製の本箱）」の中にあつたのを見つけて復刻を許可していることや、本書第27端の本文には、「將救世真主基利斯督耶穌釘在十字架架死、（略）自彼時・至如今、有一千八百餘年（救世の真の主キリスト・イエズスを十字架にはりつけに

して、(略) その時から、今に至るまで一千八百余年)」と書かれていることなどから、この通りに理解すると、実際に著されたのは1862年当時よりも、もう少し早い時期、19世紀の前半であったとも考えられる。

### 1-3. 構成

『古新聖經問答』は、先ず「主教准據」1葉で始まり、本文は全62葉（第62葉は表のみ）で、基本的には各葉1行20字で8行で構成されている。そして本文・問答部分ともに句読点が用いられている。「主教准據」を含めての総字数は19093字である。

主教准據（1葉）ムーリー主教の復刻許可 156字

#### 古新聖經問答

前半 古聖經題目（第1端から第14端まで、1葉から31葉表7行目まで）旧約聖書についての紹介・解説文と、それについての問答 9471字

後半 新聖經題目（第15端から第29端まで、31葉表8行目から62葉表まで）新約聖書についての紹介・解説文と、それについての問答 9466字

前半部分の古聖經題目は、第1葉から31葉表7行目までで、後半の新聖經題目は、31葉表8行目から最後62葉表までである。上記の通り、量的にもほぼ半々で、全29端の各端は、それぞれ量的にもほぼ平均している。各端の冒頭には、例えば「第一端天主造世界」というふうに、それぞれ題目<sup>6)</sup>があり、続いて前半が新旧約聖書の内容についての紹介・解説部分、後半が前半の紹介・解説部分についての問答の形式となっている。

## 2. 『古新聖經問答』のことばについて

さて、次に本書で使われている「ことば」について考えてみる。表紙に続く第1葉には、ムーリー主教による次のような復刻許可が付されている。

#### 主教准據

中國聖教書籍雖甚繁曠然究論古新聖經者甚稀  
余於書篋得古新聖經問答一冊披閱之下甚喜此  
書典訓切實於教中信友大有裨益雖其文詞庸俗

然便於人人通曉能使閱者洞明聖教原始要終之  
道顯揚天主撫育保存之恩凡誠心事主之人自克  
全其信望愛之德矣故付剞劂以公同好聊為教衆  
熱心之一助云

天主降生一千八百六十二年

主教若瑟瑪爾濟亞爾慕理孟准鐫

(主教復刻許可)

中国にはキリスト教の書籍はたいへん多くあるが、新旧約聖書を論じたものは極めて少ない。わたしは本箱から『古新聖經問答』という書物を一冊見つけ、一読し、たいへん嬉しく思った。本書は教義の教示が適切であり、キリスト教の信者に大いに裨益あるものである。その文体は卑俗ではあるが、それでこそ、人々に分かりやすく、読む者にキリスト教(聖書)の始めから終わりまでを究める道を分らせることができ、天主の慈しみと保存の恩を高め、およそ真心から主につかえる人は、自づから其の信望愛の徳を全うできるのである。故に版木を彫らせ、同好の人々に公開し、僅かながら信者の熱心さへの一助とせんとするのである。

天主降生一千八百六十二年

主教ヨゼフ・マーシャル・ムーリー・孟(振生)、復刻を許可する)

以上のように、ムーリー主教の復刻許可には、「その文体は俗ではあるが、それでこそ人々に分かりやすく、読む者にキリスト教(聖書)の始めから終わりまでを究める道を分らせることができる」と書かれている。ここからも明らかなように、ムーリー主教は、「読む者」にとっての「言葉の分かりやすさ」故に、本書の復刻を許可しており、自らの担当地区である直隸地区、すなわち華北一帯で広く読まれることを期待していた、そして、実際にも、本書はキリスト教解禁後<sup>7)</sup>は、広く流布していたのではないかと、とも考えられる。

では、この『古新聖經問答』の「ことば」とは、一体どんなものであったのか。本稿では幾つかのことばをキーワードにして、考えてみたい。

### 2-3. キーワードとその検討

そこで、本稿では、語史の観点を視野に入れ、独自に『古新聖經問答』のキーワードとして、口語の特徴となるものと、書面語の特徴となるもの、つまり同一の意味の新旧のことばを対にして、

「狠」と「甚」

「沒有」と「無」

「甚麼」と「何」

「這」と「此」

「那」と「彼」

の5組を挙げる。さらに、

「合」「同」「跟」「與」

の1組を加えて、以上の6組をとり上げる。以下、これらについて、考察することにする。

また、用例はそれぞれ5つまでとした。

2-1-1. 「狼」と「甚」について

「狼」13例（本文10例，問答3例）

1) 地堂是狼美狼快樂的地方，叫他們享福。(01b-4)

地堂（地上の天国。エデンの園）とは大変美しく大変楽しいところで、彼らに幸福を享受させた。

2) 【問】後來的人都象他如此惡麼。【答】象他的很多。(06a-2)

【問】後的人間は彼のように悪いのか。【答】彼みたいなのが大変多い。

3) 【問】撒落滿作國王的時候，如何。【答】狼太平富貴，享安樂榮華。(22a-5)

【問】サロモンが国王であったとき、どうであったか。【答】とても太平で、国は富貴で、楽しく榮華を享受した。

4) 故此他們，單單盼望復活後，得享天堂永福。也狼盼望默西亞來，增加他們的聖寵，能愛慕天主。(30b-2)

ゆえに彼らはただ復活後、天国での永遠の福を享受することを願った。またメシアが降誕して、彼らが恩寵に満たされ、天主を愛慕できるようにも切に願った。

5) 凡有痛悔改過的人，耶穌待他們狼仁慈。(38b-4)

凡そ痛く悔い改めた罪人には、イエズスは彼らに対して大変慈悲深かった。

「甚」5例（本文3例，問答2例）

6) 【答】若瑟的行實甚多，今說其大概，因他的哥哥們嫉妒，將他賣給外國人。(10b-1)

ヨゼフの働きは甚だ多い。今そのあらましを解く。彼の兄たちの嫉妬により、彼は外国の人に売られた。

7) 自從義斯辣爾分開國後，這樣先知聖人甚多。(23b-4)

イスラエルが国を離れてから、このような予言者の聖人は大変多い。

8) 他們甚明白先知們記錄下的話，又明明知道，這世上的福，萬萬不如天上的永福。(30a-8)

彼らは予言者たちの記した話をよく承知していたし、またこの世の福は、天上の永遠の福とは全く違うこともちゃんと分かっていた。

9) 【問】怎麼樣的荒亂飢餓呢。【答】是甚可慘傷的，竟有親母食其親子女者。(58a-7)

【問】どのように混乱し、飢餓状態であったのか。【答】大変痛ましいものであり、ひどいものでは母親が実の子を食べたりした。

10) 彼時奉教人、待外教人雖然甚好、到底外教人無不憎惡、仇害。(59a-1)

その時、教えを奉った人は、異教徒に対して大変好意的であったが、結局のところ、異教徒の方は憎悪し恨まないものは無かった。

「狼」の13例のうち10例は、「狼美」「狼快樂」「狼苦」「狼多」「狼惡」「狼重」「狼太平」「狼仁慈」が各々1例、「狼嚴緊」が2例で、何れも形容詞の連用修飾語としての用例である。また、残りの3例は「狼凌辱」「狼盼望」「狼畏懼」と、いずれも動詞の連用修飾語としての用例である。近世語では一般的であった「～得很」の様な、補語としての用例は本書にはない。本書では、形容詞の連用修飾語としての用例が特に目立っている。字体は全て「狼」で、「很」は1例もない。

それに対して、「很」も「狼」と同じく、用法はすべて形容詞、動詞の連用修飾語である。しかし、「甚多」2例、「甚好」「甚明白」「甚可慘傷」が各々1例の、5例しかない。数の上では「狼」が圧倒的に優勢である。

「狼」については、太田1981と1988 [注] ですでに説明がある。ここでは、太田1988での説明を挙げておく。

“很”は、元代からあるが北方語にもとづく特殊な文献のみに見え、『元曲選』などでは極めて稀。明代では稀に補語として用いる。明代の北京語では状語として用いられたことが『燕山叢録』によって知られるが、作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。清代の作品でも『儒林外史』などの用法は明代に同じ。現代でも西安・貴州など、西南の官話では、補語にのみ用いる。

2-1-1の結果としては、「狼」が形容詞の連用修飾語として多く用いられている。そして、「狼」が「甚」よりも数の上で優勢である、ということがわかる。

#### 2-1-2. 「沒有」「無」について

「沒有」31例(本文6例, 問答25例)

11) 但他們許過天主的, 全沒有遵行。(15a-2)

しかし彼らは天主に約束したことを、全く守らなかった。

12) (略)後來到了加那昂, 不但沒有聽天主的命, 消滅那些先前的惡人, 反與惡人結親, (15a-3)のちにカナアンに着くと、天主の命をきいて悪人を滅ぼすことをしなかっただけではなく、

あべこべに悪人と結婚し、

13) 【問】 那時候別處還有祭獻天主的聖堂沒有。(22b-1)

その時、別のところにも天主を祭る聖堂はあったのか。

14) 如德亞國人，被擄之後，雖然同外教人在一處，到底總沒有隨了異端，還恭敬惟一天主。(27b-7)

ユダヤ国のひとは虜となった後、異教の人と一つところにいたにも関わらず、ついに異端に従うことなく、ただひとりの天主を敬いとおした。

15) 【答】 不但沒有減少，而且增盛，愈致命，奉教者愈多。(61b-4)

【答】 減少しなかつただけではなく、増えて盛んになり、殉教者が増えれば増えるほど、教えを信仰するものが増えた。

「無」34例(本文28例、問答6例)

16) 彼時不用衣服，因為性情未壞，並不羞愧，且無各樣苦難災病死亡等事。(01b-7)

その時、彼らは衣服を身につける必要がなかった。なぜならば心が未だ乱れておらず、羞恥心など無く、そして様々な苦難、病難、死亡なども無かったからである。

17) 【答】 無水地方，他們飲甚麼。(13a-2)

【答】 水の無いところで、彼らは何を飲んだのか。

18) 此與前輩先知所預言者無異也。(34b-4)

これは先の予言者が予言したところのものと異なるところがなかった。

19) 無罪的耶穌，為有罪的人，出了贖罪的價。(45a-3)

無実のイエズスが、罪あるひとのために、贖罪の役割を果たした。

20) 聽受天主的聖言，領受聖洗之恩者無數。(50b-8)

天主の聖なるお言葉を聞き、洗礼の恩を受けたものが無数にいた。

「沒有」は31例。「無」は34例あるが、うち「無」が単独で「無(む)」という名詞の意味を表すものが3例ある。よって、同じく31例になる。また、単独で「沒」というものは無い。「沒有」の31例のうち、13例は句末におかれて疑問文をつくる「～沒有」としての用法である。そして、これらはいずれも問答部分の「問(とい)」で用いられている。

「～沒有」については、太田1981、準句末助詞の項に、次のような説明がある。

《沒有》も完了または過去のばあい用いる。これが用いられるようになったのは明代である。

また、香坂1983 [注] の「～沒有」の項では、

「王力の『中国現代語法』上册 p. 254に存在の‘有’の否定の‘沒有’と疑問文をつくる‘沒有’の使用法について，“連個規矩都沒有”，不能說成“連個規矩都沒”，“吃葯沒有”不能說成“吃葯沒”といっている。」とある。続いて用例があつて、さらに、

「王力の説は現代語の普通の言い方に限定したものとみた方がいい。」とある。

本書での句末疑問「～沒有」の用例は、すべて王力の説に同じ用法である。

「～沒有」以外の18例中では、動詞を否定するものが「沒有離開」「沒有遵行」「沒有沾染」「沒有燒死」「沒有許下」など14例、「ない」という意味では4例である。

「無」は名詞を除いて31例あるが、このうち「無數」「無比」「無碍」「無心」「無用」「無奈」「無益」は、『紅樓夢詞典』に見だしがある。このほか、「無形」「無像」「無異」「無罪」も、現代語では結びつきが強く、これらはいづれも単語として考えられているものである。よって、「沒有」に対しての「無」は13例しか用いられていないことになる。このうち、3例は「無不」である。残りの10例は、すべて名詞あるいは名詞的なものを目的語にとる動詞としての用例である。

「沒有」と「無」でも、数の上では「沒有」のほうが優勢で、特に問答部分では、「沒有」が多くなっている。そして、用法でも住み分けられていて、機能分担がはっきりしている。

2-1-2の結果としては、句末反復疑問の「沒有」が多用され、「無」は単語の一部としての用例が目立つ、ということが出来る。

### 2-1-3. 「甚麼」「何」について

「甚麼」85例（本文2例，問答83例）

21) 【問】他們在曠野地方喫甚麼。(13a-1)

【問】彼らは荒野で何を食べたのか。

22) 【問】祭臺在甚麼地方。(15a-7)

【問】祭壇はどこにあったのか。

23) 【問】這是甚麼意思。(22b-2)

【問】これはどんな意味か。

24) 【問】講的是甚麼道理。(39a-1)

【問】説いたのはどんな道理か。

25) 【問】耶穌在甚麼時候，令保祿為宗徒。(53a-1)

【問】イエズスはいつ，パウロに使徒にならせたか。

「何」24例（本文5例，問答19例）



26) 地堂内不拘何樹之果，全許他們食。(01b-6)

地堂（地上の天国。エデンの園）のうちのいずれの樹の果実でも、全て彼らに食べてもよいと言われた。

27) 【問】為何天主有這樣的命。(08b-3)

【問】どうして天主はこのような命令を出されたのか。

28) 【問】何時天主給了他們書教。(13a-3)

【問】いつ天主は彼らに教を与えられたのか。

29) 【問】耶穌受洗後，往何處去。(37a-2)

【問】イエスは洗礼を受けた後、どこに行かれたのか。

30) 【問】彼時教友，有何不善之事，致外教人如此殘害。(60a-1)

その時、信者は、どのような善くないことをして、異教徒のこのような虐殺を招いたのか。

「甚麼」が85例、「何」が24例であるが、特に問答部分では、「甚麼」が、「何」の4倍強、用いられている。

「甚麼」は85例、そして「為甚麼」の24例がある。「為甚麼」のすべてと、「甚麼」の83例が、問答部分の「問（とい）」にあり、疑問文に用いられている。また「甚麼地方」5例、「甚麼式様」1例、「甚麼約」1例、「甚麼聖跡」4例、「甚麼邪像」1例、「甚麼事情」2例、「甚麼意思」2例、「甚麼苦難」1例、「甚麼益處」1例、「甚麼時候」4例、「甚麼賞」1例、「甚麼本分」1例、「甚麼道理」3例、「甚麼規矩」1例、「甚麼憑據」1例、「甚麼表様」1例、「甚麼苦」1例、「甚麼刑罰」1例、「甚麼奇事」1例、「甚麼緣故」1例、「甚麼權」1例、「甚麼效驗」1例、「甚麼別的效驗」1例、「甚麼奧妙的事情」1例などで38例である。47例は単独で、「～是甚麼」「甚麼是～」など「～はなにか？」というふうに用いられている。

「何」は24例（「為何」3例を含む）あるが、「何樹」1例、「何時」3例、「何處」7例、「何物」1例、「何人」3例「何事」1例の計16例のように、3分の2が単音節語についている。二音節語では「何效驗」の1例のみで、この他、「有何不善之事」がある。単独での用例では、「何為天主經」の1例しかなく、「甚麼」単独での47例には、はるかに及ばない。また、「為甚麼」の24例に対しても、「為何」はわずか3例となっている。また「何」で「怎麼」にあたるものは、「何不將古聖若瑟的行實，細講一講」「何能想望天上之光榮」の2例である。

#### 2-1-4. 「這」「此」について

「這」82例（本文52例、問答30例）

31) 這是天主造人的本意。(01a-7)

これは天主が人間をおつくりになった本来の考えである。

32) 【問】 還有許的，比這些更貴重的麼。(08a-5)

【問】 これらよりも更に貴重なことを約束したものはあるのか。

33) 這個救世者，雖然是天主子，到底也是達未之子。(19b-5)

この救世者は，天主の御子であるが，結局のところはダヴィドの子でもある。

34) 這都是先知們預錄在書冊上的。(28b-1)

これは全て予言者たちが書物の上に予言して記したことである。

35) 【答】 耶穌降福葡萄酒，向宗徒說，這是我的血，就是我新約的血。(43b-7)

【答】 イエズスは葡萄酒を祝福して，使徒たちに，これはわたしの血である，これこそがわたしの新約の血である，と言われた。

「此」49例(本文45例，問答5例)

36) 厄娃從伊引誘，摘食此果，並送給亞當同食。(02b-8)

エヴァはその誘惑に従って，この果実をもぎ取って食べ，またアダムに渡して食べさせた。

37) 天主也救了他，使作此國大臣。(09a-6)

天主もまた彼を救われ，この国の大臣にされた。

38) 我要在此石上，立我聖教會，即天國的鑰匙，我亦付與尔手。(36b-8)

わたしはこの石の上に，わたしの聖なる教会を建てたい，このことは，すなわち天国の鍵を，お前の手に授けるということだ。

39) 向他們說，此即我之身體。(42b-1)

彼らに，これがすなわちわたしの身体である，と言われた。

40) 【問】 為甚麼日露撒冷府城，遭此重罰。(58a-8)

【問】 どうしてイエルサレムの町は，この重い罰に遭ったのか。

「這」が82例，「此」が49例あるが，問答部分では，「這」が圧倒的に多くなっている。

「這」は「這是～」16例をはじめ単独での用例が25例で最も多くなっているが，場所を表すものは無い。「這些」6例，「這個」14例，「這百姓」1例，「這一支」3例，「這十二個兒子」1例，「這樣」7例，「這十二個的」1例，「這聖跡」1例，「這巴斯卦」1例，「這十誡」3例，「這結約櫃」1例，「這加那昂福地」1例，「這聖櫃」1例，「這異端邪教」1例，「這體面」1例，「這兩國」1例，「這一座天主堂」1例，「這聖神」1例，「這一位聖神」1例，「這許多先知」1例，「這一家」1例，「這世上」1例，「這一位聖子」1例，「這十二個」1例，「這耶穌」1例，「這一日」1例，「這奧妙事情」1例，「這記號」1例，「這兩様子書」1例などの用例が，これに続き，いずれも単音節語につくものは無い。

「此」については，31例が「此果」1例，「此罪」5例，「此國」1例，「此時」7例，「此

日」2例、「此等」1例、「此事」1例、「此處」6例、「此石」1例、「此禮」1例、「此刑」1例、「此人」1例、「此位」1例のように、単音節語についている。二音節以上のものを修飾しているものは、「此祭臺」1例、「此恭敬邪神之黨」1例、「此三王」1例、「此重罰」2例、「此毒虐」1例、「此致命者」1例の計6例のみである。「因此」2例、「如此」1例、「為此」は1例で、あと場所を表す「在此」が2例ある。「此」が単独で「これ」という意味のものは8例である。

#### 2-1-5. 「那」「彼」について

「那」52例（本文24例，問答28例）

41) 【問】難道那時候，沒有一個天主所愛的人麼。(06a-2)

その時、天主が愛された人間が一人もいなかった訳ではあるまい。

42) 宰一隻羊羔，燒着喫，那羊羔的血，刷在各家門上，以為記號。(10a-2)

一匹の子羊を殺し、焼いて食べ、その子羊の血を、各家の入り口に塗り、目じるしとするように命じた。

43) 【問】那些恭敬邪神的叫甚麼。(18b-3)

それらの、邪神を敬うものを何というのか。

44) 義斯辣厄尔那十支人，流落在各方，總沒有得回來。(25b-7)

イスラエルのあの十支派のひとは、様々な方向へ流れ落ちていき、帰ってこられる者はずいぶん少なかった。

45) 【問】那時候宗徒們怎麼樣。(44a-1)

その時、使徒たちはどのようなであったのか。

「彼」37例（本文25例，問答12例）

46) 彼時天主罰長蟲，說後來要從女人中生一位壓長蟲頭的。(03a-1)

その時、天主は蛇を罰して、後に、女の人のなかから一人、蛇の頭を踏みつける者が誕生するであろう、と言われた。

47) 【問】彼時天主怎麼樣。【答】天主先罰了長蟲。(03b-8)

【問】その時、天主はどのようにされたのか。【答】天主はまず蛇を罰せられた。

48) 彼時加里肋亞，有一小城，名納匝肋。(31b-3)

その時、ガリラヤに、ナザレトという小さな町があった。

49) 彼時人人都想，若瑟是耶穌之父。(32b-8)

その時、人々はみな、ヨゼフがイエズスの父であると思っていた。

50) 【答】從彼時直至如今，還是如此。(58b-3)

その時から今に至るまで、依然としてこのようである。

「那」については、「那」という文字が61例ある。このうち「哪」にあたるものが9例あるので、実際は52例になる。「那」が単独で、ものや場所をさす代詞としての用例はない。場所を表すものとしては「那裡」の4例、「那地方」の1例がある。他は、すべて「那時候」16例、「那些」12例、「那個」1例、「那羊羔」1例、「那買他的人」1例、「那一夜」1例、「那時」2例、「那邪神」2例、「那十支」4例、「那單為顧肉身的」1例、「那要改過遷善的人們」1例、「那無心悔罪的人」1例、「那博學」1例、「那仇害耶穌的人」1例、「那十字架」1例、「那一年」1例のように指示詞としての用例である。

「彼」は37例ある。このうち、「彼時」での用例が29例を占める。「彼時」は3例である。この他、「彼此」3例、「從彼而來」1例、「任彼殘害」1例がある。

2-1-3, 2-1-4, 2-1-5の結果としては、「甚麼」が「何」,「這」が「此」,「那」が「彼」に対して非常に多い、ということができる。

#### 2-1-6. 「合」「同」「與」「和」「跟」について

「合」2例(本文2例, 問答0例)

- 51) 那時候, 有如達瑪加伯, 同他兄弟們, 帶着兵器, 合外國的惡人爭戰, (28a-5)  
その時, ユダ・マカベが, 彼の兄弟たちとともに武器を手に執り, 外国の悪人と戦い…,  
52) 與耶穌預先合他說的話相同。(43a-3)  
イエズスが前もって彼に言われた話と同じである。

「同」32例(本文22例, 問答10例)

- 53) 天主為定一個同他立約的憑據, 命他行割損的禮, (07a-8)  
天主は彼と約束したことの一つの証を定めるために, 彼に割礼をさせ…,  
54) 後又同外教打仗, 天主賞他戰勝, 敵寇莫不賓服。(19a-4)  
後にまた異教徒と戦った時, 天主は彼に戦での勝利を与え, 敵や侵略者で服さないものは無かった。  
55) 【答】是如達瑪加伯, 同他的弟兄們。(29a-1)  
ユダ・マカベと彼の兄弟たちである。  
56) 因此如德亞國博學, 同發利色義等, 盡生嫉妬。(40a-7)  
だからユダヤ国の博士とファリサイ派の人たちは, 尽く嫉妬した。  
57) 【答】就講道理。講道之時。郭尔奈略, 同彼處人, 都領受聖神。(52b-1)  
【答】すぐに道理を説いた。道理を説いたとき, コルネリオとかの地の人は, みな聖霊を授かった。

「與」20例（本文15例，問答5例）

58) 他們都預先說過，撒瑪里亞，與日露撒冷府，後來全要毀壞。(23b-8)

彼らはともに，サマリアとイエルサレムの町は後にどちらも破壊されることになっている，と予言していた。

59) 撒瑪里亞與如達，兩國的國王，總不肯聽先知的提醒教訓。(25b-3)

サマリアとユダの両国の国王は，最後まで予言者の注意や教訓を聞こうとしなかった。

60) 此與前輩先知所預言者無異也。(34b-4)

これは先の予言者が予言したものと違うところが無いのだ。

61) 【答】(略) 聖多黙，及聖雅各伯，與其弟聖達豆，(37b-4)

【答】聖トマ，それから聖ヤコボとその弟聖タデオ，

62) 【答】因為耶穌所講的都是教人愛謙德，愛貧窮，愛受苦，與他們的道理相反。(41b-3)

【答】イエズスが説いていることは，全て人々に謙讓の徳を愛させ，貧窮を愛させ，苦しみを受けることを愛させるものであり，彼らの道理と相反するものだったからである。

「和」「跟」0例

「合」は2例あるが，いずれも介詞としての用法である。「同」は32例あり，介詞と連詞と2つの用法をもっている。「與」は20例で，介詞が14例，連詞が5例，そして動詞が1例ある。また，本書で「和」や「跟」の用例はみられない。

太田1981では，「合」について，次のように説明がある。

《和》と同様に用いられるが，時代ははるかに降る。

として，介詞としての用法のみ挙げられている。

「同」については，同じく太田1981「同」「同着」の項で，次のように説明がある。

《同》は以上のように多く介詞として用いるが時としては連詞として用いることもある。

「跟」は，本書では1例も見られない。太田1981では，

動詞としては或者の後にづくこと。これが介詞化したものも，やはりつき従う意を失っていない。例えば，

我們只在太太屋裏看屋子，不大跟太太姑娘出門（紅82）

（わたしはただ奥様のお部屋で番をするだけで，あまり奥様お嬢様について外に行くことはあ

りません)

これが共同の介詞または連詞として用いられた例はきわめて新しいようである。

と述べられている。

2-1-6の結果としては、「合」が介詞としての用法のみで、「同」が介詞・連詞の用法をあわせ持つ。そして、書面語の特徴である「與」が、解説部分で、圧倒的に多く使われている、ということが出来る。

## 2-2. その他のことばについて

その他、若干の本書で見られる特徴あることばを、以下に挙げる。

### 2-2-1. 現代語と意味が異なるもの

以下に挙げるのはいずれも現代語と意味の異なるものである。

「罷工」…現代語では「ストライキ」

65) 六日内萬物齊備・至第七日罷工。(01a-5)

六日のうちに万物は全て整い、七日目に至って仕事(創造)をやめた。

「本分」…現代語では「本文、職責」

66) 耶穌同若瑟做木匠本分。(32b-8)

イエズスはヨゼフと大工の仕事をした

67) 【問】聖若瑟做的是甚麼本分。【答】做的是木匠本分。(34a-2)

【問】聖ヨゼフがしたのはどんな仕事か。【答】したのは大工の仕事である。

「火車」…現代語では「汽車」

68) 後來坐一火車，登空而去，至今未死。(23b-6)

そのあと一台の火の車に乗って、天空に登って行き、今に至るもまだ死んでいない。

「記號」…現代語では「記号」

69) 宗徒們，遵耶穌的命，分行天下，教訓萬民，於未分行之先，公定一個信德的記號為分別有真信德的教友。這記號全全包含聖教的道理，就是信經十二誄。(53a-4/53a-5)

使徒たちは、イエズスの命に従い、天下に分かれて行き、万民を教え諭したが、行く前に、それぞれが真の信仰の信者を得るために、一つの信仰の心に刻むべきしるしをともに定めた。この心に刻むべきしるしは全て聖教の道理を含むもので、他でもなく使徒信条の十二条である。

70) 【問】宗徒們未分行天下之先，定立了甚麼。【答】宗徒們公同立定一個信德作記號。【問】為甚麼要這個記號。【答】為分別有真信德的教友。【問】信德的記號，是甚麼。【答】是信經。(54b-2/54b-2/54b-3)

【問】使徒たちがまだ天下に分かれて行く前に，何を定めたのか。【答】使徒たちは一つの信仰の心に刻むべきしるしをともに定めた。【問】どうしてこの心に刻むべきしるしが必要なのか。【答】それぞれ真の信仰の信者を得るためである。【問】信仰の心に刻むべきしるしとは何か。【答】使徒信条である。

「使徒信条」は普通，中国語では「信經」である。しかし，本書では「使徒信条」を指すことばとしては，「記號」のみ使われている。

「伊」…現代語では三人称単数

71) 他們單想引誘人反背天主，有一個魔鬼附了長蟲，引誘厄娃食天主所禁止的命果。厄娃從伊引誘摘食此果，並送給亞當同食。(2b-8)

彼らはただ人間を天主に背くように誘惑しようとはばかり考えていた。ある悪魔が蛇にのりうつつて，天主が食べるのを禁じられた命の果実を食べるようにエヴァを誘惑した。エヴァはその(悪魔の)誘惑によって，この果実をもぎ取って食べ，またアダムに渡して食べさせた。

本書では，三人称では「他、他們」が用いられている。1箇所のみ「伊」が用いられ，ここでは「悪魔」を指している。

2-2-2. 北方語の匂いの強いもの

「長蟲」

72) 他們單想引誘人反背天主，有一個魔鬼附了長蟲，引誘厄娃食天主所禁止的命果。(2b-7)  
彼らはただ人間を天主に背くように誘惑しようとはばかり考えていた。ある悪魔が蛇にのりうつつて，天主が食べるのを禁じた命の果実を食べるようにエヴァを誘惑した。

73) 【問】他怎麼誘惑了第一個人。【答】附了長蟲，先誘厄娃食命果。(3b-7)

【問】悪魔はどのように最初の人を誘惑したのか。【答】蛇にのりうつつて，先ずエヴァに命の果実を食べるように誘惑した。

「土」

74) 天主用土造了人的肉身，又賦給一個象似天主的靈魂使他生活，(1a-5)

天主は塵を用いて人の肉体をつくり，またそれに天主に似た靈魂を授け，この世に生を与え…，

75) 【問】天主用甚麼造第一個人。【答】用土造肉身。(2a-4)

【問】天主は何を用いて最初の人をつくったのか。【答】塵を用いて肉体をつくった。

「不拘」

76) 除此以外，地堂内不拘何樹之果，全許他們食。(1b-5)

このほかに，地堂（地上の天国。エデンの園）のうちの何れの樹の果実も，全て彼らに食べてもよいといわれた。

77) 所以如今，不拘何人，生在世上全染此罪。(3b-1)

よって今は，何人に関わらず，この世に生きている者はいずれもこの罪に染まっている。

78) 【問】至今這個罪惡還有麼。【答】還有，不拘何人，生在世上全帶此罪。(4b-4)

【問】いまに至るもこの罪悪はまだあるのか。【答】まだある。何人に関わらず，この世に生きている者はいずれもこの罪を持っている。

以上，現代語と意味の違うものには，「罷工」「本分」「火車」「記號」「伊」などがある。また，北方語の匂いの強いものでは，「長蟲」「土」「不拘」などがある。

また，本書では，無条件文の従接を導くものは「不拘」のみであり，「無論」「不論」がともに一例も無い，ということが大きな特徴であると言える。

「不拘」については，太田1981に，

「不拘甚麼飲食，我吃不下去了（どんなたべ物でも，わたしはのどをとおらなくなった）」と『醒世姻縁傳』からの用例が挙げられていて，「《不拘》は清代ではきわめて多く用いられた。」

とある。また，「不拘」は，『紅樓夢』や『儿女英雄伝』にも，多用されていることから，北方語の特徴の一つとみることが出来ると思われる。

### 3. さいごに

以上，2-3. で見てきたように，『古新聖經問答』の本文では，「口語の特徴となる語彙」，「書面語の特徴となる語彙」の双方が，数の上では大差がない。しかし，内容をより分かりやすく解説しようとした各端後半の問答部分では明らかに，「口語の特徴となる語彙」の方が圧倒的に多くなっている。ここから，本書で用いられているのは，復刻された1862年当時か，或いは最初に述べたように「將救世真主基利斯督耶穌釘在十字架上死，（略）自彼時，至如今，有一千八百餘年」が正しいとするならば，嘉慶年間或いは道光初，つまり19世紀前半に於ける，中国の北方の口語であった，若しくは限りなく北方の口頭語に近いものであったと



推察できるのではないかと思われる。そして、この『古新聖經問答』のような存在、そしてそこに用いられているそれぞれのことばは、中国語の、清代中・後期の口語、特に北方の口語がいかなるものであったか、を考えていく上で、我々に非常に大きなヒントを与えてくれるのではないかと考える。

## 注

- ・1) 本稿では、語彙資料として、涂宗涛点校『古新聖經問答』(1992、12月、天津社会科学院出版社)を使用した。
- 2) ムーリー・Mouly Joseph Martial (1807-1868)、中国語名は孟振生、フランス籍のラザリスト会士で、1856年から直隸(河北省の旧名)の主教を務めた。
- 3) 直隸・河北省の旧名、または華北一帯を指す。
- 4) 徐宗澤『明清間耶穌会士訳著提要』18/22頁に著録されており、賀清泰(ポワロ)によって漢訳された29種の經典名を挙げ、さらに『聖經之序』『再序』が記載されている。
- 5) 賀清泰(ポワロ)については、方豪『中国天主教史人物伝』、栄振華『在華耶穌会士列伝及書目補編』(上下)等に詳細に記されている。また、この他、矢沢利彦「嘉慶十年(1805)の天主教禁圧」(1939『東亞論叢・近代支那研究』)、同「嘉慶十六年の天主教禁圧」(1940『東洋学報27-3加藤博士還暦記念・東洋史集説』)、方豪「北堂図書館蔵書志」(『方豪六十自定稿』・下冊)、『マーカトニー訪中記』(東洋文庫)、清代檔案史料『眞明園』(全二冊、1991上海古籍出版社)、楊伯達『清代院画』(1993柴禁城出版社)、『文物』(1997、No5、文物出版社)、鄭逸梅『清宮揭秘』(1987南粵出版社)等の資料から総合して判断し、筆者は『古新聖經問答』の訳者が「賀清泰(ポワロ)」である可能性を指摘したい。なお、訳者については、本稿の考察の範囲とせず、今後の課題にしたい。
- 6) 『古新聖經問答』の第1端から第29端までの題目はそれぞれ、以下の通りである。
  - 第1端「第一端天主造世界」
  - 第2端「第二端論初人犯罪」
  - 第3端「第三端論洪水講性教」
  - 第4端「第四端論亞巴郎及諸古聖」
  - 第5端「第五端論義斯辣厄里德在厄日多國為奴並講巴斯卦贈禮」
  - 第6端「第六端論義斯辣厄里德走曠野地方並講書教」
  - 第7端「第七端論天主同義斯辣厄里德立約」
  - 第8端「第八端論異端邪教」
  - 第9端「第九端論達未並講基利斯督默西亞」
  - 第10端「第十端論撒落滿建立天主堂」
  - 第11端「第十一端論先知聖人」
  - 第12端「第十二端論如達國人被擄在巴彼隆地方」
  - 第13端「第十三端論如德亞國人被擄以後之事」
  - 第14端「第十四端論如德亞國人有兩樣一樣是為救靈魂的一樣是為顧肉身的」
  - 第15端「第十五端論耶穌基利斯督降誕」
  - 第16端「第十六端論聖若翰保弟斯大」
  - 第17端「第十七端論耶穌選擇宗徒」
  - 第18端「第十八端論耶穌講道」
  - 第19端「第十九端論害耶穌的人」

- 第20端 「第二十端論耶穌受難」
- 第21端 「第二十一端論耶穌被釘十字架死」
- 第22端 「第二十二端論耶穌復活」
- 第23端 「第二十三端論聖神降臨」
- 第24端 「第二十四端論天主引外教人棄邪歸正」
- 第25端 「第二十五端論各處傳教」
- 第26端 「第二十六端論天主聖言有兩樣一經書上記的一是口傳的」
- 第27端 「第二十七端論滅日露撒冷府的來歴」
- 第28端 「第二十八端論聖教窘難」
- 第29端 「第二十九端論聖教後平安並講隱修的行實」

7) キリスト教の伝道解禁は1860年。吉田1997によると、19世紀における中国プロテスタント伝道は、第二次アヘン戦争による天津条約・北京条約の締結を境として、キリスト教禁制時代のプロテスタント伝道開拓期（1860年以前）と、条約によって伝道が公認されてより以後のプロテスタント伝道発展期の二期に分かれる。そして、発展期である1860年以後はキリスト教伝道公認のもとに伝道活動は大規模に展開された。

#### 主要参考文献

- 太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』(1981朋友書店)
- 太田辰夫 1988 『中国語史通考』(白帝社)
- 香坂順一 1983 『白話語彙の研究』(光生館)
- 佐伯好郎 1949 『清朝基督教の研究』(春秋社)
- 徐宗澤 1949 『明清間耶穌會士訳著提要』(中華書局)
- 吉田寅 1997 『中国プロテスタント伝道史研究』(汲古書院)